

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	研究の種
別タイトル	Research seeds
作成者（著者）	横井, 郁子
公開者	東邦看護学会
発行日	2019.03.01
ISSN	21855757
掲載情報	東邦看護学会誌. 16(2).
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD26050172

【巻頭言】

研究の種

Research seeds

東邦看護学会 理事長

横井 郁子

第16回東邦看護学術集会から「取り組み報告」という研究の種を探し育てる部門が設置されました。そして、この報告が年々活発になってきています。看護実践は研究成果を基に看護師たちが状況、患者に合わせて看護を遂行します。学術的知識だけでなく経験知も総動員し、責任を負う覚悟を持って現場に立つ看護という仕事は、まさに国家資格だと日々感じています。基本的方法にどのような重みづけ、色づけをしていくかを思案することは看護のやりがいであり、自分自身のキャリア形成の方向性を示唆する重要なことだと思っています。本学会学術集会の「取り組み報告」は、まさに重みづけ、色付けの報告であり、それが増えてきたということは、やりがいを持ってチャレンジしている会員が増えていることだと私は捉えています。

1999年に横浜市立大学附属病院の患者取り違え事故、都立広尾病院の点滴事故と立て続けに報道され、国を挙げての対策が取られました。医療安全管理体制の整備、業務手順の見直し、チェックリストの作成、法令遵守、指差し確認……。マニュアル通りに行うことが最終目的かと錯覚してしまうほどの業務環境だったように思います。個別性を重んじた看護実践について議論をする余裕がなくなっていたにもかかわらず、患者さんを患者様と呼ぶようになったのもこの頃でした。いま振り返るとバランスの悪さに苦笑してしまいましたが、当時は患者さんをはじめ国民への不信感をなんとかしなくてはとの思いで皆必死だったように思います。それから20年。安全に注意が行き過ぎると人は苦しくなるということに多くのベテランたちが気づき始めているように感じます。転倒予防として患者をベッドに抑制することの代償は一般の方々も知っています。同時に、いつまでも住み慣れた街でという地域包括ケアシステムも手伝って、“その人を守り支える”方法にはいろいろあるということを認識する時代にもなりました。まさにいま看護の時代なのです。

第18回学術集会での取り組み報告では退院支援の事例や看護外来の取り組みなど、組織のルールを守りながらも卒にとどまらない挑戦的な報告が多数見られました。そして、個人的に注目したのは発表者たちの年齢です。たぶん医療安全対策で日本の医療界が苦しくもがいていた時期に看護師になったのではと思われる方々でした。「マニュアル通りにやればいい」と主張する世代であってもおかしくないと覚悟していたのですが、報告を聞いて猛省しました。

ぜひ、学術集会の「日々の取り組み報告」を積極的に活用してください。そして、聴衆と議論し、まずは自分自身の経験知を高めてください。その中に研究として探求すべき種が必ずあるように思います。

2019年3月吉日
